２０２４年９月８日

北広島近郊3町の戦争遺跡を訪ねて

北広島九条の会

はじめに

北海道の地名はアイヌ語起源のものが少なくありません。今回訪れる３町の町名もすべて該当します。長沼町は、アイヌ語タンネトーの意味「細長い沼」から、由仁町は「温泉のあるところ」を意味するアイヌ語ユウンニの音から、栗山町はアイヌ語ヤム・ニ・ウシの意味「栗の木の繁茂するところ」からとられています。

１．「野呂栄太郎碑」（長沼町）

野呂栄太郎は、1900（明治 33）年、夕張郡長沼村（当時）の農家に生まれました。1910（明治 43）年、小学校３年の時に関節炎が悪化し、右足を膝下から切断し、義足となりました。小学校を卒業した後の 1914（大正３）年に、北海道庁立の札幌第一中学校（現札幌南高校）を受験しますが、不合格となります。翌年も受験しましたが、またも不合格でした。不審に思った父親が学校に問い合わせたところ、身体上の理由であることがわかりました。

そこで、野呂は私立の北海中学校（現北海高校）に進みます。北海中学校では野球部のマネージャーとなり、学業成績も優秀で、1920（大正９）年の卒業の際、『北海タイムス』に、「北海道の英才、義足の野呂栄太郎君卒業す」との記事が載りました。そして、慶応大学に入学し、経済学を研究しながら、反戦平和と社会変革の闘いに身を投じていきます。

1925（大正 14）年に制定された治安維持法により、大学の社会科学研究会の関係者 30 数名が国内初の弾圧をうけました（京都学連事件）が、野呂はその一人でした。教授たちに大学に残って助手になるようすすめられますが、一部教授の反対で実現せず、産業労働調査所に入所します。1930（昭和５）年に、『日本資本主義発達史』を出版しますが、このころ日本共産党に入党したといわれています。

1932（昭和７）年５月、野呂栄太郎の指導のもとに、大塚金之助、小林良正、服部之総、羽仁五郎、平野義太郎、山田盛太郎らの若手研究者の参加する『日本資本主義発達史講座』（全七巻、岩波書店）の刊行が始まりました。野呂は趣意書で「歴史の解釈ではなくその変革」を志したと述べていますが、日本資本主義の現状と歴史を分析した研究は、当時の官公庁でも広く読まれるなど、社会科学研究のあらたな達成として、大きな反響を呼びました。執筆者の検挙や発売禁止処分を受けながらも、『講座』全巻の刊行が成し遂げられました（1933 年 8 月）。

1922（大正 11）年に創立された日本共産党は、一昨年創立 100 年を迎え、党史『日本共産党の百年』が刊行されましたが、同書では、この業績について、「これらの研究は、科学的社会主義の理論にみちびかれながら、日本社会を分析した先駆的な意義をもち、その内容は、国際的に見てもきわめて高い水準にあり、今日から見ても歴史学と経済学における科学的な金字塔というべき偉業です」と評価されています。

厳しい弾圧の中で、肺結核の身体をおして『日本資本主義発達史講座』刊行への援助を続けながら、指導部の一人として党の再建活動の先頭にたちます。しかし、1933（昭和８）年 11 月、最後の連絡に出た野呂は京成押上駅で検挙され、警察の拷問による病状悪化で、翌年２月、33 歳で死去しました。

1974（昭和 49）年、「野呂栄太郎碑」が建立されました。誕生日の４月 30 日には碑前祭が、札幌の平岸霊園では墓前祭が毎年行われています。同年、母校の長沼中央小学校の前庭に、「野呂栄太郎学童の像」が建てられました。また、町史『長沼町九十年史』には、野呂の事績が８ページにわたって詳述されています。

２．陸軍特別大演習と「聖蹟記念碑」（由仁町）

戦前の日本、大日本帝国憲法下の天皇は、主権者として、議会の関与を受けない天皇大権をもっていました。その一つが、陸軍と海軍の最高指揮・統率権を意味する統帥権です（大日本帝国憲法第 11 条「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」）。軍人としての天皇の称号は、唯一の大元帥でした。天皇は平時に軍隊の士気を鼓舞するため、様々な行事に臨みましたが、その大きなものが陸軍では毎年秋に実施する陸軍特別大演習、海軍では３年に１度実施する海軍特別大演習でした。

陸軍特別大演習は 1892（明治 25）年から始まり、最後の 34 回目が、1936（昭和 11）年の 10 月３日から５日まで、旧島松駅逓所からほど近い島松演習場を含む石狩平野を舞台に行われました。翌年には日中戦争が始まっていますが、北海道で実施されたのはソ連を意識してのことでした。大本営が北大農学部におかれ、昭和天皇が３日は由仁村（当時）で、５日は恵庭村（当時）島松で演習を視察しました。陸軍特別大演習には２万人の将兵が南北両軍に分かれ参加しましたが、北軍は旭川第７師団、南軍は弘前第８師団でした。

実施後、聖蹟といわれる、天皇が立ち寄った場所に記念碑が建てられました。北広島市内の戦争遺跡めぐりで訪れる恵庭市の桜森、島松演習場内の二扇台、由仁町伏見台の三か所です。

伏見台の聖蹟記念碑の碑文には次のように刻まれています。

表「聖蹟　聖上御統監之地」

裏「昭和十一年十月三日畏クモ車駕石狩ノ大野ニ幸シ陸軍特別大演習ヲ此ノ地ニ統監シ給フ是レ洵ニ曠古ノ栄光ナリト謂フヘシ乃チ茲ニ空知支庁管内小学校竝ニ青年学校児童生徒職員一同相謀リ記念碑ヲ建設シ以テ後人ヲ感発セント云爾」

表の「聖蹟」は横書きされており、天皇に同行した広田弘毅首相が揮毫したものです。裏の碑文からは、聖蹟記念碑が小学校教員と小学生の募金によって

建てられたことがわかります。

３．角田炭鉱と「中国人殉難者之墓」（栗山町）

1941（昭和 16）年のアジア・太平洋戦争の開戦により戦線が拡大し、日本は大規模な兵力・労働力の動員を余儀なくされました。日本本土以外の植民地・占領地からの動員も行われます。 労働力の動員は強制連行ともいわれますが、朝鮮人は日本本土へ約７０ 万人が動員されました。占領地中国からの動員は、1944 年から始まり、全国で約４万人に達しました。そのうち、北海道は最多の約１万５千人です。北見市の水銀鉱山イトムカが全国で初めての公式の動員先でした。

栗山町にあった北炭経営の角田炭鉱には、1944 年に 294 人の中国人が連行されてきました。中には上海で拉致された 14 歳の鳳儀萍少年もいました。過酷な坑内労働と劣悪な食事による栄養失調で、10 か月間で 98 人（33%）が亡くなりました。逃亡を図ったものの見つかり、殺された人もいました。

戦後の 1948（昭和 23）年、日出共同墓地に「中国人労務者之墓」が建立されました。傷みがひどくなったため、2007（平成 19）年には、町民の募金によって「中国人殉難者之墓」として建て替えられました。

1972（昭和 47）年から、毎年８月７日に、中国人殉難者慰霊祭実行委員会（栗山町・栗山町日中友好協会関係者・栗山町社会福祉協議会）により追悼慰霊祭が執り行われています。2006（平成 18）年には、帰国後、高名な医師となった鳳儀萍氏が 61 年ぶりに来道し、慰霊祭に参列しています（2008・2009 年も参列）。

なお、1898（明治 31）年に採掘が始まった角田炭鉱は、1970（昭和 45）年に閉山しています。

＊　本資料作成にあたって、主に下記の諸文献を参考にしました。

『新北海道史』、『長沼町九十年史』、『由仁町史』、『栗山町史』、『天皇・皇室辞典』（岩波書店）、『北海道大百科事典』（北海道新聞社）、『日本陸海軍総合事典』（東京大学出版会）、『戦争遺跡事典』（柏書房）、『北海道の歴史　下』（北海道新聞社）、『日本近現代史を読む』（新日本出版社）、野呂栄太郎『日本資本主義発達史』（岩波文庫）、塩沢冨美子『野呂栄太郎の想い出』（新日本出版社）、塩沢冨美子『野呂栄太郎とともに』（未来社）、『日本共産党の百年』（新日本出版社）、『天皇・天皇制を読む』（東京大学出版会）、杉原達『中国人強制連行』（岩波新書）、『強制連行中国人殉難者慰霊碑資料集』（日本僑報社）、『北海道開拓殉難者調査報告書』、鳳儀萍『仲間に守られて、僕は地獄を生き抜いた』